
ひるやすみ

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひるやすみ

【Nコード】

N02110

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

昼休み、ゲームに興じる二人の日常。
微妙な距離を行ったり来たり。
甘かったり温かったりに耐性のある方へ。

「むう。キミは意外と、強気に出るタイプだったんだな」

唇に人差し指を当てるのは、先輩が考え事をするときの癖だった。ほっそりとした指、整えてもいないのに形のよい爪、柔らかそうな唇。

思わず凝視してしまいそうになって、目を閉じる。

「いまさら気づいたんですか？ 俺、結構負けず嫌いなんですよ」「奇遇だな。それは私もだ」

それは知ってます。嫌と言うほど。

まさか、一度オセロに勝っただけで、昼休みごとに勝負することになるとは思いませんでしたよ、本当に。

今のところ、2勝2敗1分けのイーブン。

ちなみに1分けの種目は将棋で、時間切れによるドロウだった。

今日の種目はチェス。

どうやら先輩は、将棋よりチェスの方が好みらしくて、昨日とは違う余裕が見てとれる。

「チェスは潔くていいな。倒れた駒が寝返ることがない」

「そうですか？ なんか、人間味があっというじゃないですか。持ち駒制度」

「せっかく大事に扱ってやった輩が、牙を剥くのだぞ？ 気持ちがいいことはあるまい。それに、縁は途切れたら終わり。そういうものだ」

「取り返せば、また自分のところに帰ってくる方が、俺は好きですけどね。別れたらそれまで、なんて寂しいじゃないですか。奪還の

チャンスがある方がいいっていうか」

先輩の手が止まる。

ん？ そんなにいい手でもなかった気がするのだけれど。

「どうしました、先輩」

「……いや、なんでもない。淡白に見えて、意外と強引なのだな、キミは」

不自然に視線が逸らされる。

普段冷静な先輩がこういう素振りを見せるのは珍しい。

ポーンが動く。俺にもわかるほどの悪手。

先輩の人差し指が、机をせわしなく叩いている。

これは、考えがまとまっていない証拠だ。

「その、だ。キミはお気に入りの駒を取られたら、割とこだわる方か？」

「ああ、そういうところありますね。勝負そっちのけで奪還しちゃうかも」

「ふむ。ついでに聞くが、ナイトは好きかね？ 捻くれ者のじゃじや馬だが」

「ナイトや桂馬は好きですね。忘れた頃にやってくる奇襲が面白いっていうか」

「なるほど。うん。参考になる」

なんだか盛大に話が噛み合っていないような気がする。

たまに先輩はこんな、ゲームと関係あるのかよくわからない質問をしてくる。

そんなときの彼女は、何やら考え込んだり、急にしかめ面をしたりと、百面相で見ている飽きない。

「……うむ。キミに気に入られた駒は幸せ者だろうな」
「はあ、どうも。で、チェックメイト」

見え見えの負け局面だが、先輩の思考はどこか明後日に飛んでいたらしい。

盤上を見回して、表情が固まる。

「い、今はナシだっ！ 卑怯だぞ、色仕掛けとは！」

「何言ってるんですか。ほら、今日は俺の勝ちですよね」

「くっ……明日は負けないからなっ」

チェス盤を畳む先輩に、ふと思い浮かんだ疑問を投げかける。

「で、これは何番勝負なんですか？」

「む、飽きたのか？ 私と勝負をするのは嫌か？ 面倒くさい女だとか思っているのか？ ゲームはいいぞ？ 脳を刺激することは痴呆予防にもなるし、相手の思考を想像するということは共感性の促進にも繋がる。他人に共感できる男は女にもてるぞ！ いや、これ以上変にもてられても困るがまあそれはいい。本題はあれだ。キミが私と昼休みを過ごすということに否定的な感情を持っているかどうかということだ。この回答は重要だぞ。とりあえず心の中でセーブしておけ。無論選択肢を間違ってもリセットは許可しないが」

途中から何を言ってるかわかりません先輩。

まあ、俺にとって気になるのは「いつ終わってくれるのか」ではなく、「いつ終わってしまうのか」なわけだ。

先輩の意図はさておき、しばらく続けてくれるっていつのなら、それに乗らない手はない。

「先輩が嫌って言うまでつきあいますけど。何だってこんな節操ないラインナップで勝負するんですか」

「それはあれだ。サンプルケースは複数計測し、己を知り、相手を知れば百戦危うからずというやつだよ」

「うへ、いつか俺、攻め落とされますか」

「ああ、私は負けず嫌いだからね。勝つと決めたら手段は選ばないよ。覚悟しておくように」

拳を握り締めて力説する先輩に、思わず口元が緩んでしまう。

まったく、そんなに意気込まなくても、とつくに俺は先輩に負けているんだけども。

まあ、悔しいので、今はそんなことは口にしないでおく。

俺も、先輩に負けず劣らず、負けず嫌いなものだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0211o/>

ひるやすみ

2010年10月9日04時14分発行